

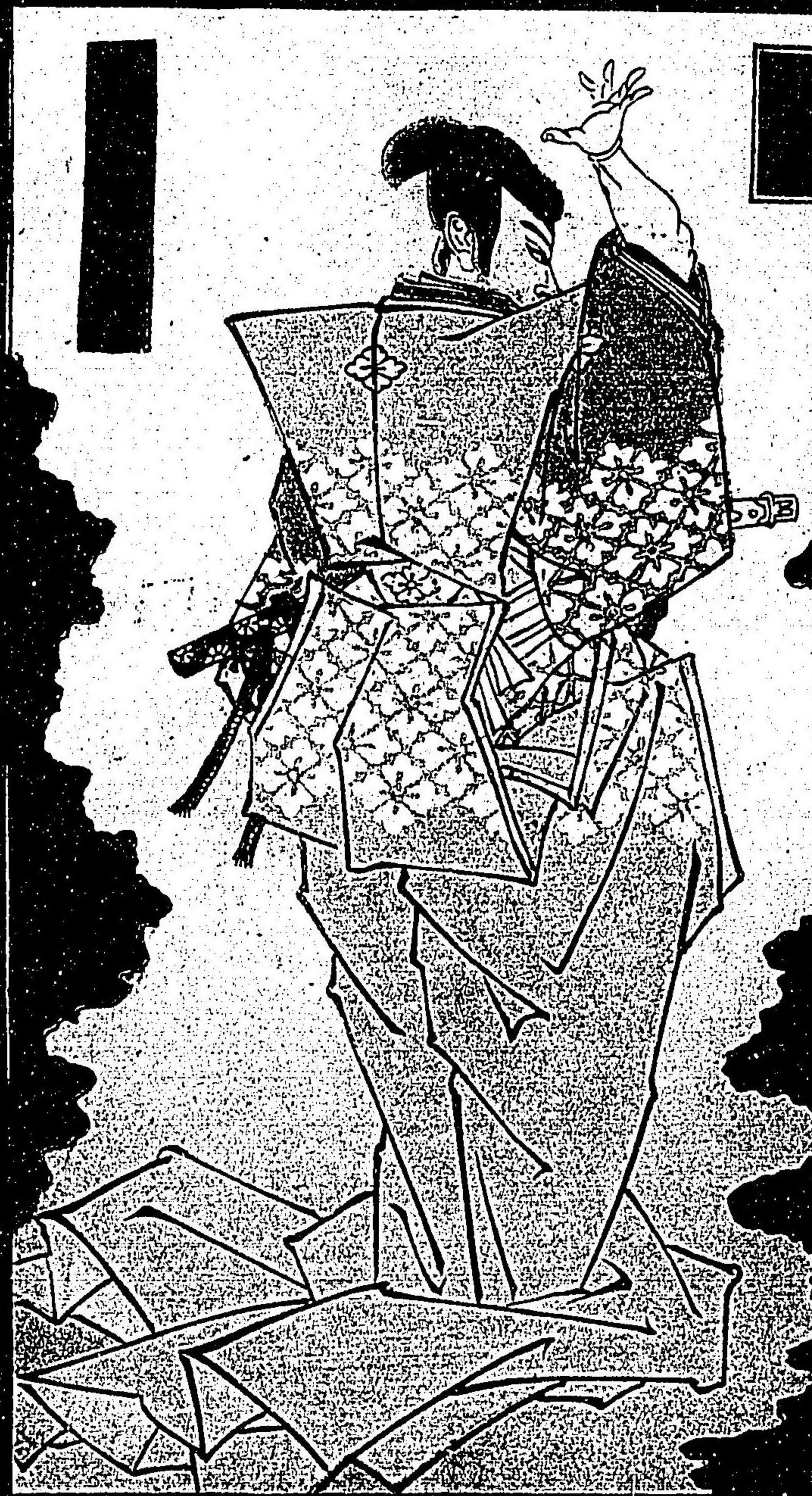
特 44

996

新編 漢書 卷之九

107 5 10





[Redacted]



地亞原  
國國



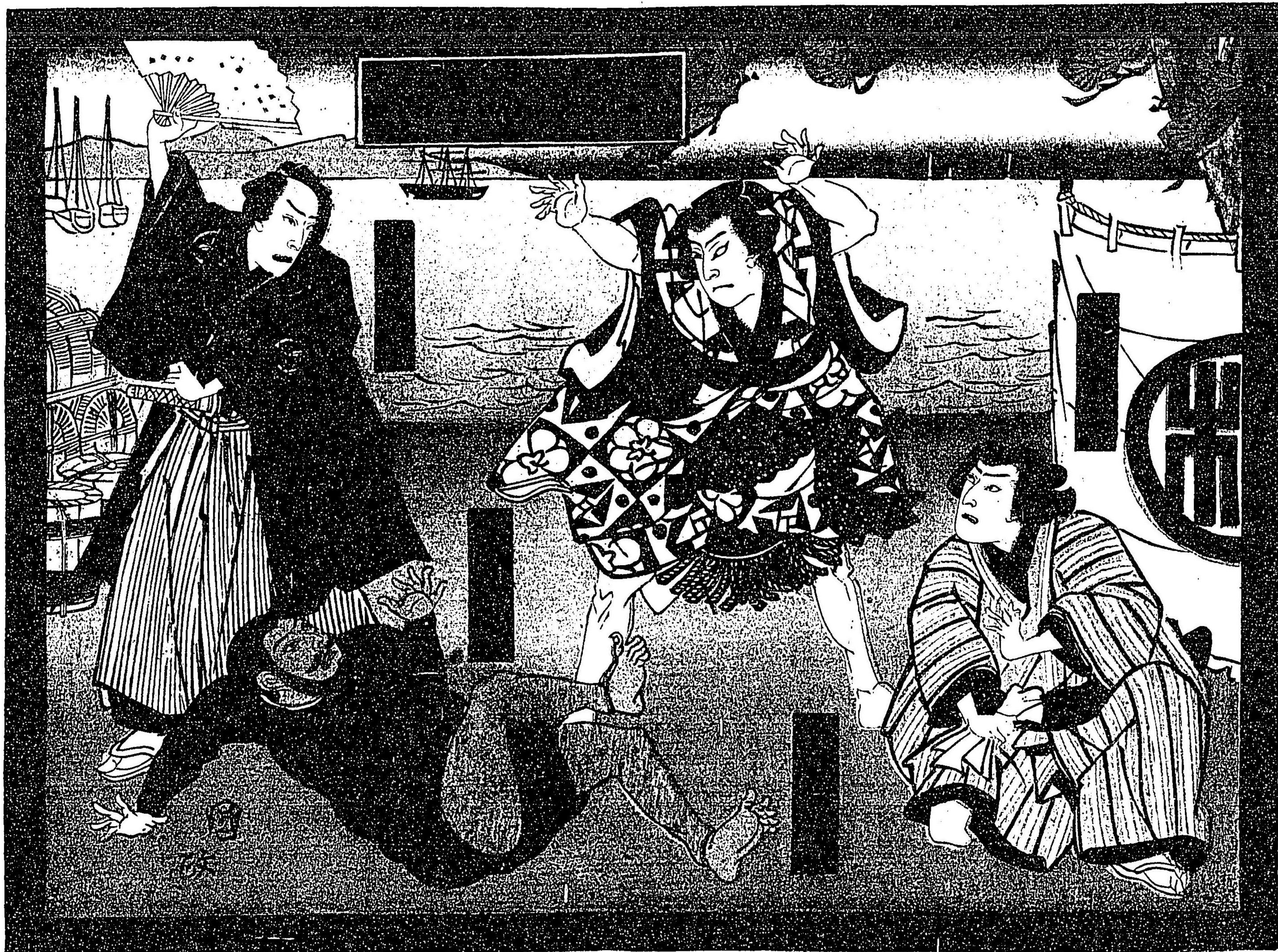
外記左團次

仁木菊五郎

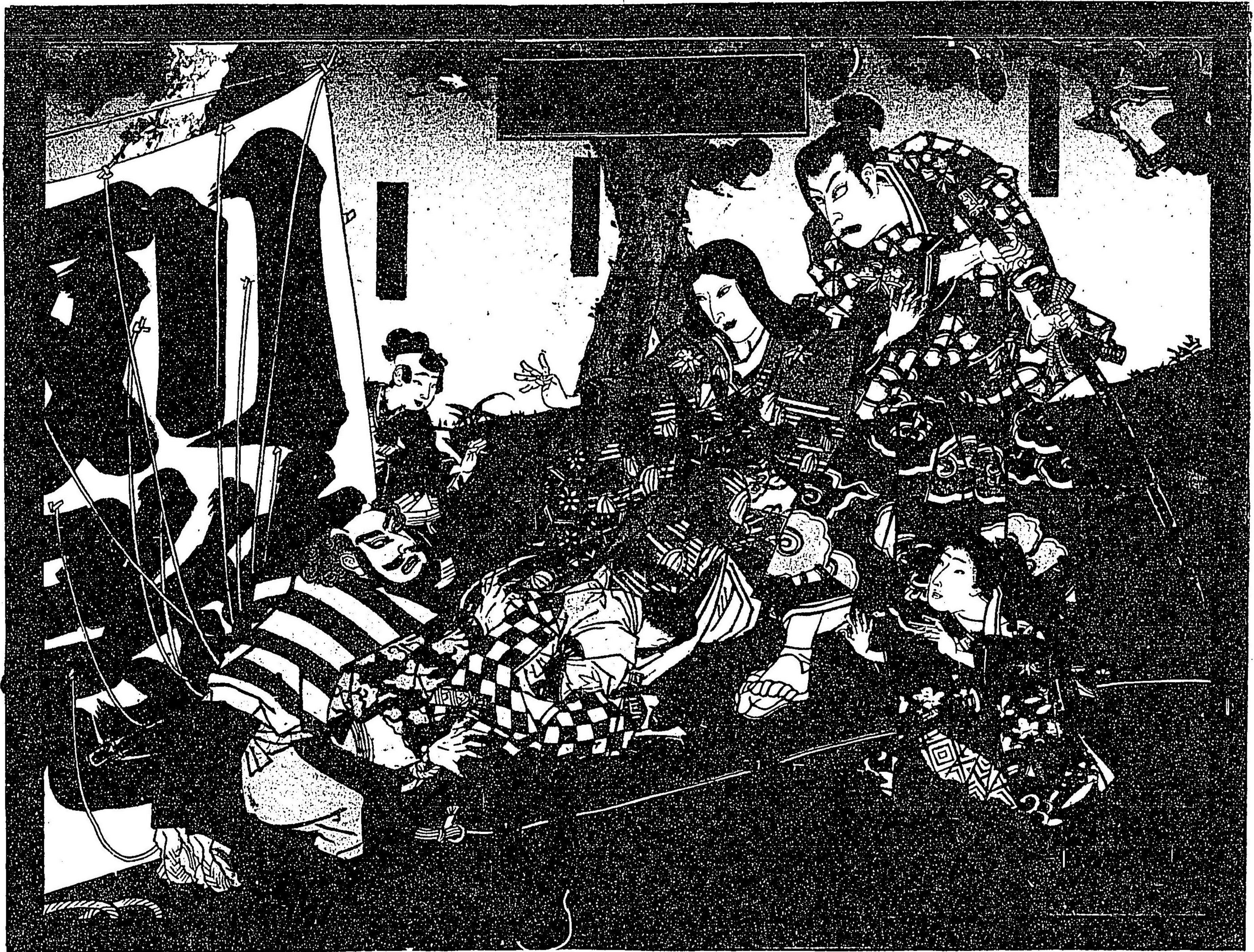




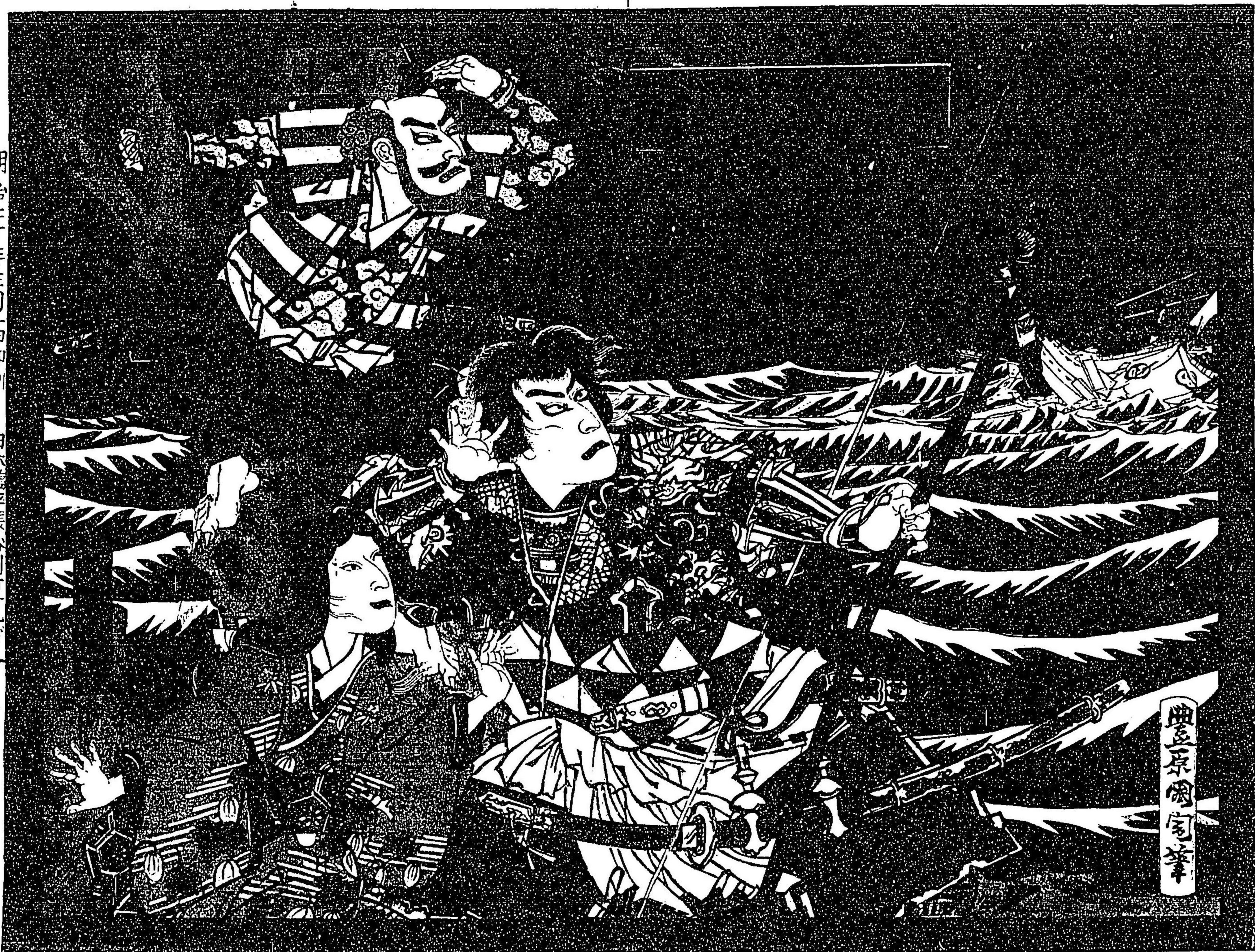








明治三十年三月一日印刷  
日本橋區長谷川丁十九番  
白紙印刷

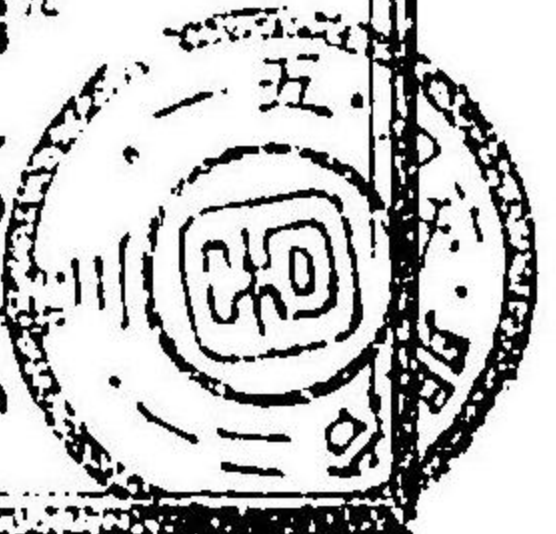


明治三十年三月一日印刷

No 9167

裏表伊達染小袖 (第一)

大場道益宅之場



爰の所も柴井町々隣者大場道益が玄關の藥取其藥禮の七加減百味筆筒の引出しの敷の  
 あれども売多く見掛け功者の醫者あるが隣りの下駄屋お使のるゝか竹と云ふ懸幕なし千  
 をお心を碎く自前宗益下男なる小助を供お歸り來り嘸兄貴が待つて居やうと與ふ入る折  
 柄隣家の下女お竹が親花賣佐五兵衛出來りお竹お逢たいものなれどお内へ行てい嘸しも  
 ならず是より下男の小助お頼みお竹お逢て思へば過去の宿業か僅な水お花が咲しがな  
 暮しの草花より其日その日を送り兼花さへ水を上兼てまはれ勝なる親と子が今日お縮ま  
 る金の人用二兩の所り都合して上げやうからと受合バ親仁の悦び別れたる此時宗益の買  
 ひし鯨を持ちへよど小助お言附非戸端へ持行跡へ道益の屋敷の首尾を問かくればお悦び  
 なされませ世の毒藥の其賞お然も小判て二百兩鬼貫様より御褒美他人の居ぬ間お渡し  
 申すと語るうしろ暖簾より小助の之を伺ひたり神ならぬ身の密知らず弟宗益を近く招き  
 愚老が屋敷へ御禮お行等なれど大醉故其方代りお參つて吳と弟宗益を出しやりぬ爰お  
 竹の二兩金お切迫詰つて此家お來り  
 ら二兩位の隣無だの今寐て居られるから手紙  
 を買お行お竹の是を道益が枕元お置んとする時大場道益目を覺し様子に聞けば二兩のむ  
 しん元より懸着なすものから直お二兩の褒美の金の内より是をお竹お渡しまなだれか  
 ればお竹の驚きいろくいと件の手紙を附てコレ此様おぬしから附けおみしたと  
 言掛ればお竹の夫を取らんとし引合はづみ金二といふ所より引ちされお竹の是を手お持  
 てあわてふためき道益の下駄をばはきて走り行跡お道益一人りごと又能い夢でも見やう  
 かど財布を首お掛て寝る此時非戸の小助より下男の小助伺ひ出て門口をバそつと叩け抜  
 足して内お入り屏風を除けて寢息を考へ首お掛たる財布をバ取らんとなせば目を覺しヤ  
 おのれの小助と聲かくればモウ是迄と片邊お置く出刃庖丁を取るより早く道益をまた、  
 かお切付るヤおのれのお切をつたなど武者振付をふり拂ひ又切り付るを潜り抜有り合ふ藥  
 籠煙草益取て投掛け逃廻る藥を刻む敷紙の上を互お踏合バ二人の足の血汐お染みどうど  
 倒るゝ道益が財布へ入れし金を奪ひおつこり笑つて襦袢の袖お包みし儘お懷中なし此儘  
 爰を逃たならおれが仕業と知れるの必定をしらぬ振て爰お残らう何おしる此金を持て居  
 ちやアけんのだと様の下へ隠す爰へ宗益歸り來びつくりなす小助の素知らぬ振おて油  
 指を持歸り來り小助も俱お仰天さす犬血の附し金包を籠お入る花賣佐五兵衛此籠をかつ  
 き行く

裏表伊達染小袖

(第二)

外記左衛門長屋住居の場

名おしおふ五十四部の一家中いらか並ぶる其中お組す誠の陸奥お忠義も厚き表札の家老渡邊外記左衛門長屋住居の物敷奇の座敷の檜櫓庭前も茶事を好めばどこやらお雅味を合みて清らかなり此家お仕ふる若徒の名お似付かぬ白髪のお嘉兵衛娘おりの歸りの遅きを衆事煩らひ居たりし折中間八藏入り來り断しのうちお娘おりく諸所の買物漸々調へ歸りて見れば中間八藏おりの頭へ目を附て嘉兵衛どのが断しのあつた筈は是だのユリヤアよさそうな代呂物だわへといへばおりの此筈櫓の模様を証摺おし落した人があつたらば激て上げて下さんせと頼めば八藏おりの暇を告て立出つゝ去る人お頼まれておりくが簪を巻上げて替りお落して借た筈差て居るといふおりの幸ひといつゝ味ひ仕事お成るわへと悦びて時を觸れつゝ歸り行跡おありく日那様お申上たい事が有と障子を明け外記左衛門獨り好める茶の手前愛へおりの進み出唯今町へ出ましたら足輕衆の噂し若君様のお見舞お八汐様沖の井様松島様道益老の妻小楳どののお御容体を伺いせ怪しい事でも有ならは御詮議なさると申事さぞ政岡様の御心配いどのやうお座りませうと語るを聞て外記左衛門、スリヤ心よからぬ彈正が姉八汐がお見舞お上りしといかなる巧みおらんも知れず併政岡お申含め置たれば容易く彼等が奸計お落入る事いよ有まじ掛る折こそ神の力おと掃窺明神を祈る折入來る山中鹿之介談話お時を移し、茶を進せやうと釜の蓋取りても湯氣の立ざるお一同不審をなすを止め膳を上る嘉藤太器れ出外記左衛門お切て掛る外記の當身お嘉藤太氣絶する鹿之介おばりて活を入れ漸く蘇生したるお外記是を皆問ふお外記を殺せと頼んだら愛お居るおりくお頼みとおありくお落せし簪を証摺の爲お取替せし二世のかための品なりと言張る故談義の御迄嘉兵衛は預け跡の山中鹿之介外記と密談なす折柄袖ヶ崎より使者成りと來るお汐澤丹三郎此度鬼貫彈正等が逆意おより外記の心勞察せられ下し置る、お蓋頂蓋致すと引受る折柄奥より懸出る嘉藤太續て出るおりくお見るより外記が釜を打落す嘉藤太吸筒取上げてぐつと呑み進々苦痛の体なれば外記左衛門お進みより嘉藤太是てそちの木望て有うがなと星をさゝれて面を上げ毒と知りつゝ呑だるお身の言譯をなさん爲と是より吾身の上を語り嘉兵衛おの悴おりくお兄といふ事譯り外記左衛門も命を捨て不孝の罪を侘るお感心なすかゝる所へ若徒一人走せ來り唯今管領山名公より過急の沙名お沙ざりませう外記いうなづき細川公と事違ひ彈正方の山名より夜中とア如何成る事か打捨置れぬ今宵の仕義忠義の道の一筋お衣服改め出行きけり

裏表伊達染小袖

(第三)

伊達彦殿之場

陸奥の黄金花咲く金額わたりまばゆき奥殿の軒場お茂る若竹を懸ふ雀も若君の愛を慰む  
 親子鳥育も木々の糸遊ぶ霞柳引薄櫻政岡の若君お打向ひヤレ〜唯今の危ひ事て彦ざり  
 ました今日沖の井とのが彦ざつたればこそ事なふ濟ました夫のそふと彦前さまの嘸彦  
 彦屈千松もはつと仕やつたらうキアモウ能程何成と彦意お叶ふた事をして遊びや〜  
 といへば鶴喜代政岡おコレ乳母もう伺いふても大事ないかや政岡の手をつかへ外お誰も  
 居りませぬ何成共彦意遊ばせはんお先程沖の井との君へ彦膳を上たとき日頃此乳母が申  
 上た事お聞入遊ばしてよふマアお上り遊ばさなんだ夫てこそ此政岡がお育つた若君様サ  
 お出かし遊ばしたなアと懇ればおどなき稚氣おおなかいすいてもひもじうない何共な  
 いと老うめん作りこちや泣かせぬわいのうと顔を撫て泣顔を隠す心の流石おも名おふ  
 武士の種なりき母の健康さいぢらしさコレ飯拵らへお掛りませうとかたへお飾る黒柳よ  
 り取り出す錦の袋物風呂お掛たる茶飯釜湯の試を千松お吞す茶碗も樂ならておすゑが業  
 を信樂やいつ水指をかき桶流す泪の水くばし心の清ひわらひ米釜お移して風呂の炭直  
 してあふぐ扇さへ骨も碎くる思ひなり鶴喜代君の聲高よコレ政岡飯のまだかや〜イヨウ  
 今よ差上ますコレ千松彦前様が彦退屈飯の出来る其間お氣お入の雀の離鳥も親鳥が來  
 る時分そこへ直してお伽しや千松のアイ〜と返事すれど立惱み歩行姿もたよ〜と  
 置直したる小鳥籠政岡のコレ千松いつもの雀の唄を認ふてお慰めすさぬか唄を諷ふ其内  
 おいちやんと飯が出来るわいのうサ、うたや〜鶴喜代と千松のこちの裏のちさの木に  
 雀が三羽とまつて〜一羽の雀のいふ事や〜夕邊呼だる花嫁彦〜コレ政岡お  
 りや狎み成たいわいやいどうらやみたまふ彦風情聞かなしさをこら〜兼テ、お道理じや  
 といひたさをまざらす聲もふるはれてわしが息子の子千松が〜七ッハツから金山へ〜  
 一年までともまた見得ぬ〜二年待てともまた見得ぬ〜三年目おみづの來てはろり〜  
 どおなきやるが〜力なく〜泣聲を隠して連れる母親が諷ふ唱歌も身お當り泪吞込み  
 風呂先の屏風へひと身を寄せて奥を憚る忍びなきサアお悦び遊ばせどふやら斯うやら  
 飯お成ました氣遣ひないサア〜彦前さまといふおいと〜お悦び千万石を手の内お握  
 る彦身お引かへてた〜ト握りのおぎり飯を數の珍味と思召彦心根のもつたいなやと君  
 を思ひ親子を思ひ心を興お忍ぶ山忍び泪の折柄お腰元一人走來り榮彦前さまの彦入りと  
 告ぐ政岡の不審顔時時折もをりどて榮彦前様のお入とハテ合點の行ぬ事なりと案じ  
 るひねの内と外心配りて居たりけり

裏表伊達染小袖

(第四)

鶴喜代彦殿床下の場

國亂れて忠臣顯れ家貧くして孝子出と實政岡が誠思も其悴たる千松も忠と孝との二道  
 ふ死して其名を後の世お揚るゝ父母へ孝ぞかし爰お彦殿の騒がしく奥の女中が夫々手  
 分けをなして晝夜の別なく君を守護なす有さまの又勇々敷も見えたりけり奥女中竹川立  
 田忍び姿も甲斐々しく長刀かい込ばんばり持ち夜目お邊りを見廻せば中老沖の井秋人を  
 随へ是も夜中を見廻りて爰お出會へ竹川懸掛け沖の井様彦苦勞お存じますあなたも毎  
 夜の彦見廻りお察しや上ます此程追々悪人等露顯あ及び早今日お相成れと宿直の番々  
 殿軍お致さぬべ成ませぬ々々芳野どのの唯今以て戻つてい参りませぬのと問へば沖の井  
 詞を改めあなたも毎夜の宿直役彦苦勞お存じます渡邊様の彦身の上も心も心ならぬ故芳  
 野どのが戻らぬ内の實にお案事や上ます斯ういふ間も油断のならぬ怪敷術を行ふ惡  
 人竹川どのを始として劍術心得居らるゝ故めつたな事いさせませぬと語らふ内お松島爰  
 へ走せ來り皆さま爰お在有しか一大事彦さります先刻葉彦前様御歸館の後宿直役の  
 心配り彦殿の隈々見廻りしお怪敷鼠顯のれ出詮議の種の連判状をくこへてどこへか逃  
 げ去ました必ず彦油断遊ばすな彦用意あれと告る内芳野も爰へ走來り唯今戻ましたるの  
 渡邊様の鹿之助様と彦一所おて委細お断り上げしが直様彦殿へ彦上りお彦さります扱此  
 上の彦銃口彦廊下の隅々を見廻りなさんといふ折柄又も彦殿お怪敷動搖皆々身構へ成  
 す所へ黒裳束の忍びの曲者刀を抜て突立たり女中等ばら／＼懸け寄る沖の井の臆する色  
 なく彼の曲者を前へ出／＼汝の何れより忍び人たるぞ忍び難き彦殿の床下附覗ふどの儀  
 道者正敷是の惡人共へ荷膽成たる曲者ならん夜目お有れとばんばりの灯影お見れば度  
 會銀兵衛皆々驚きや、是や度會銀兵工殿々々彦殿へ忍び入し何者お頼まれしと白  
 狀しやと詰寄れば耳おも掛けぬ度會銀兵衛ソレと女中へ立掛り奥を目掛けて切入る皆々跡  
 を追て行爰お荒獅子男之助怪敷鼠を足下お踏へア、ヲ怪やな今荒獅子男之助照秀が佞人  
 ばらの讒言お依てお目通りを遣さけられ彦寢所の床下お宿直成ともいざ知らず伺ひ寄た  
 どお鼠らぬも唯の鼠じやア有めへ此鉄扇をくらはぬうちきり／＼一卷渡してなくなれど  
 持たる鉄扇おて鼠を打鼠一さんお欠け行く鼠の姿見えなくなるうちお俄お五体すくむ有様  
 此内彼方お燈り立ち仁木彈正左衛門直則の鼠の長上下お小刀を帯しみけんお疵をうけ連  
 判状を口おくはへ陰火の内お立顯とる男之助の吃度見て曲者と聲かくれば仁木彈正手裏  
 劍を打つ男之助は是れを受留め取逃したか残念やと彼方を見るうち彈正の笑ひおがらお  
 消うせぬ

裏表伊達染小袖

(第五)

評定所大廣岡の場

邪の正も勝ずとやら爰も足利家督の事ひ名おちふ仁木彈正の智辨をふるひ我意を主張し  
 容易お落着有らざるお其頃名智と噂の高き管領細川勝元の國家老なる渡邊外記の君も盡  
 すの忠義を思ひ對決有て彈正が意中をつらぬく名言お道の彈正伏罪なし事落着と成りし  
 かば彈正よりの願ひおて切腹成度趣きを即座お是をお免しあり扱介錯の外記と極り愈々  
 切腹の時お至り不意お短刀持替て外記左衛門へ突掛たり此騒動の一方ならず近習の侍士  
 駈集り取押へんと成と雖も仁木の必死を極めたれば手を負ふ者の數あれど是を捕ふる者  
 なきお是有様を見るよりも走せ來る山中鹿之介仁木がうしろへ伺ひ寄組付所へ外記左衛  
 門よろほひながら出來り仁木を目掛け突掛る仁木は是おて死してけり外記の悦こび刀を  
 抜き大惡人の仁木彈正天命思ひ知つたるかハッハはおて足利の御家も益ます無事ならん  
 と心ゆるめばうつとどりを山中登きてコレ外記左衛門殿心を惜み持たまへ疵の淺  
 手ととげまして介抱を成す其折から管領細川勝元公銀の茶碗を御手お持ら静々と立出た  
 まひホ、ホ出かした外記左衛門其方達が働き故役柄の者へ對し彈正が誤らなき故お鶴喜  
 代殿へおとがめなし懸ならねども細川勝元其方が忠臣を感じ藥湯を與ん心靜かお服藥い  
 たせと手づからは是をたまたこれ外記左衛門の形ちを改め我々しきも恐れ多くも管領たる  
 勝元様が御手づから下し賜ゆるお藥湯其加なき仕合せながら血汐のけられも御座ります  
 れば恐れ入たる義に候といふお勝元うなづきて其遠慮尤もながら痛手もあれは苦しうな  
 い苦痛をのがれい外記左衛門と仰おいなむ言葉なく山中鹿之介も傍らから外記左衛門  
 どのかたじけなくも勝元公よりの仰なればと俱々すゝめて服藥さす外記の悦び御禮申せ  
 ば管領細川勝元公外記左衛門を打見やりかゝる忠義な者共を扶持せらるゝ鶴喜代殿果報  
 どやいこん又果報つたなしとやいこん既お家名のぼつせんと成べきを死をかへり見ぬ臣  
 あつて是を救がゆゑおこと無事お家督を繼目の墨付懐中より取りいだしイヤ有難く頂戴  
 いたせ外記左衛門も是おて安堵いたしたて有ふがなど渡せば外記の押いたゞき鶴喜代が  
 家門を開くい皆もつて勝元様の御仁政偏にふかき御厚恩有難き義又御座ります最早是よ  
 りお暇をと立んとするを勝元いつくゞ見やり此儘歩行い心丸なし予が乗物を遣はす程  
 お夫おて歸邸致せよと家臣お命じて乗物を御前へ直にかき荷とせ苦しう無免すぞよハナ  
 勇ましい痛手お屈せぬ適れ健氣さ今日の振舞惡人亡び鶴喜代の家の益々万代不易門出目  
 出度祝ふて立て一張の弓の勢ひたりと謠ひたまひ附けいゝと仰せ有れば外記左衛門の  
 立上り東南西北の敵を易く亡せりと祝す

# 土佐半紙初荷艦

(第一)

小松崎青龍寺本堂の場

土佐國宇佐浦の船乗よて中濱万次郎といふ者十四才の折仲間者諸共お漁も出たる其時暴風俄然吹來り何國共なく吹流され生死の程も知れ難く一家親類打寄て死したる者と思ひ歸らめ幾年月を経るうち早十三三年忌の廻り來て今日正月命日とて小松崎なる青龍寺の墓提所なれば母を始め妹お浪も諸共お法事の延ぶ若たる所山田村の沖右衛門福浦の嶋五郎内浦の波六等豫て本堂お待居たりしが母のお沙を見るよりも沖右衛門へ進み出施主の事故お沙どのお浪を連れて焼香さつしやれハイとお沙の前へ出コレ万次郎難船してから便りが無故沖て死だお違ひないど親類衆もいゝるゝからお寺様へ御願ひ申戒名を附て貰ひ來る年毎の法事をするが此間大坂から村へござつた占殿お見て貰うたら死のせぬ達者て居るといへれたがわしもモウ六十ゆゑ長い事も有まいから達者て居るなら息の有無どうぞ顔を見せてくれと哀れ先立つ老の縁言娘お浪の是を慰め逢たいのの尤もなれどそんな事をお言做成と佛様の爲も成ませぬ兄さんの爲を思ふなら能御念佛をおつしやりませと母を慰む折柄お漁師網七郎來り万次郎が戻つて來た然も庄屋が附添て万次郎出て來る庄屋兩人詞を捕へ死んだと思つた万次郎戻つて來れば婆さんも娘も悦べくと引附られて母お沙夢かど計り忙然たり万次郎の母おむかひはんお夢の様でござります何の鬼もわれ住持様へ此由を云内襖押明けて立出る住職頼聞上人能く万次郎願師られしぞ漂流してより早十年所詮此世お亡事と思ひの外お息才で能歸つて座つたぞ是迄漂流せられし内も定めし能地お座つたらふが何れお長らく居られしぞ後學の爲頼聞おとふぞお聞せ下されい万次郎の形を改め咄せば長い事ながら難辛苦を仕た荒増御住持様や皆の衆マア聞て下され十六年跡の今月今日丁度今頃小松崎を二三里出たと思つた頃暴風たと言聞もなく船櫃も利ぬ大じけに沖へ流され二三日たよふ内お又西が吹込んで來て流され方だい十二三日といふもの食といつて水計り勞れ果て居た所無人島へ吹付られ船の碎けて命辛々瀬々嶋へ上つたのでヤレ嬉しやと氣がゆるみ五人の内お四人迄死て殘るの吾一人心細くも年月を島お送つて居る内お亞米利加松の此島へ着けた時命を取らるゝ事なるかど手を合して拜みし所人お鬼の無もので合衆國迄連れ行れサンフランシスコといふ大きな港へ着まして陸へ上つて見ればびつくり何から何迄廣大で中々口お盡せませぬ追々繪圖を珍覽お入れんど語るを聞て上人の釋迦も説かざる異國の委敷喇しを承とり一ツの徳を得て座する勞れも有ふ又其内左様あればお住持様ドレお暇と立ち歸る



土佐半紙初荷艦

(第二)

沙留山崎下座敷の場

棧橋お餘寒の水解かねて思ひおどる胸の内筆おいのする言の葉も心せかれて跡や先亂  
 れし雁の鳴聲も雨を合みて軒近く二階お在の四人連西國方の浪士がひとくお難な  
 さるのの中濱さまの事の機だのおよしさんが内々で私しへ知らして呉たゆゑ悪い事とい  
 思へども真階子から抜き足して隣り座敷お伺ふ共知らずお四人が咄すを聞べそら恐しい  
 旦那様を殺そうといふ悪巧み少しも早く此事をお知らせ申て上げやうとみを書けども心  
 がせかれ一ツ事をバ幾度となく書も人目を憚りて裏より通ふ万次郎下女が知らせお先立  
 て枝折戸あけて内お入り刀を抜て座お着けお直の最も嬉し氣およふマアお出なされま  
 した此程のさつぱりお出がない故おどうなされましたかとお案事申て居りましたと書か  
 けしお懐ろへ入れるをぢろりと見て取る中濱久し振じや氣うつ晴しお酒を申附やうと手  
 をたゝかんとするを止めお酒の跡おなされませとして小サな聲をなされませと種々お心  
 を置く様子万次郎の不審おれず唯今是へ參つてより手お葉の合ぬあいさつより二階の客  
 お知らすなの手をたゝいての悪いのと合點の行ぬ様子ぞと問つゝ件のみお氣を付今手紙  
 を認め居つたるのあれの何れへ還るみぞ苦敷なけれお出して見せよ但しおれお見せら  
 れぬか如何々々と質問のれお咄し致すも心遣ひお故手紙お書ましたれとまだ書掛けての  
 座りまするがどつくり讀て下さりませと差出すみを取上て子細いかお見る内もわた  
 り見廻すお直の氣配り讀かねるをバ操返し見れば己が身の上おはつと計りよ打驚き未だ  
 日本未開國故文明國の事情を知らず只黒船と見たならバ打拂へといふ神君の御遺言を守  
 る故外國人を夷敵なりと心得違ひ成者多く夫故我のや及はず御目附役なる林公をバ討  
 と申かあなたを殺した其上おて愛宕山よ寄合てお登城なさる途中お待受け天誅とやらお  
 行ふと申事て座ります夫お兼々お咄しお林様の大切なお方と聞て居ますればどうぞ此  
 事お知らせ申あなたも御無事お濟ます様なされたら如何お座りますか聞く中濱のうな  
 づきて尤も成事ながら此事委しくお上なバ公儀の威光て夫々おお手當あるの必定なれど  
 浪士といへど諸家の舊藩万一事の起りなバ外おの洋洲の敵を引受内地に亂の有る時内容  
 易ならざる大事なり事釋便お納る様思案をせねバ成らぬわへ愛ぞ一生懸命と思案お暮て  
 居たりける稍有て万次郎御國の爲ならいさぎよふ我一命も捨ねばならぬ是より直お愛宕  
 お昇り壯士の者を諭してくれん若も某し討れなバ申付け置く書翰を送り男子お優つて事  
 を成せハア今打たるの最早四ツ時後れなバ事の破れお直視箱を持ってハイと取出す視箱お  
 直の是が別れかと互お名残を惜みけり

土佐半紙初荷艦

(第三)

芝罘山會合の場

さし昇る初更の月の牙渡り銀波お照や海原お漁夫の翁も消て行最物凄き愛宕山昇る足元踏んで伺ひ來たる有志の武士吾川郡右衛門を先お立て跡より阪田雄次郎續て船橋浦内と邊りお心月影の小開き所お立ちやすらい船橋聲を低くして吾川殿あたりお障りの浮座らぬかなどいへば吾川の打うなづき今宵の月も未の方早九ツも過つるならん社放れし此邊の誰憚る者もなし幸ひ是お水屋あり暫し是おて協談をなさん各々傍りへ心を附て翌日の手術を阪田氏承知致した各も所存あらば打聞ん郡右衛門の聲をひそめ彼の万次郎を今宵の内殿治橋内へ呼出し一命斷んと思ひしも不在おかゝるいすかど成り残念おの思へども申さば彼の枝葉も同然先彼二の次お此上り目附役たる林大學計て捨んが當節柄故役人の皆夫々お手利を抱へ路次の警固致しおれらうかつお事お成難し夫故今宵の歸宅せず此山上おて夜を明し翌の登城を待伏せなし望を果さん我所存何と多同意下さるかな各々如何おと問掛けば阪田の前へ進み出此一舉を企つ上り天お命を捧げし我々望みを果し日本のお害を除かん目的おて誓ひし一紙の血判お則立國有志の精心よしや其場て死する共聊惜む事やあらん唯遺憾なり万次郎を打渡し心の曇りの晴れども空晴渡る山上お響く荷の音絶て市中もひとつそり真夜中お喋し合する愛宕山翌日の花咲春を待深き底意の武士が打揃ふたる今宵の會合此曉が待るゝと時節をまつの木下開問へお答ふる山ひこのことまおあらぬ此方より中濱万次郎顯れ出其望みの叶ひますまい手前唯今男坂より登山致し一部始終を承りつたお夫の大きな了簡違ひ今開明お進む世の中實の拙者も是へ参り彼西洋の事情をバ各々方おお断し中事の利害を説ん存念夫ども聞かず中濱を各々方お討んとなすか此中濱も外國より持参成たる鉄砲あり醫へ武術のおふくともやみく討るゝ所存ならず又の拙者が咄しを聽か如何々々お詰寄れバ壯士の遺がお手も出ずためらひ居れバ中濱の斯六ツかしく云て居てのちつと断が仕まういから土州生れの船人お成て断しを仕ませらと是より先年漂流せし然も天保するの年亞米利加船お助けられ何年間と向ふお居る内おつくり仕たのの其國の大きい事日本を五六十も寄せた大國て日本などの猫のひたへと語るを打聞ん郡右衛門阪田を始め人々の或は怒り或は感じ漸々時勢を悟りけれバ万次郎の大お悦び乍併身等此事公儀へ洩れぬ内何卒退去下されたしと頼みお一同承諾し早真夜中も時移る傾く月の西へ行開き葉影お人々が夜明ぬ内に江戸の地を跡お見なして行時早驛路お氣も軽く心も安き退去の身の上万次郎の空打詠め變る世勢を感じたり

# 土佐半紙初荷艦

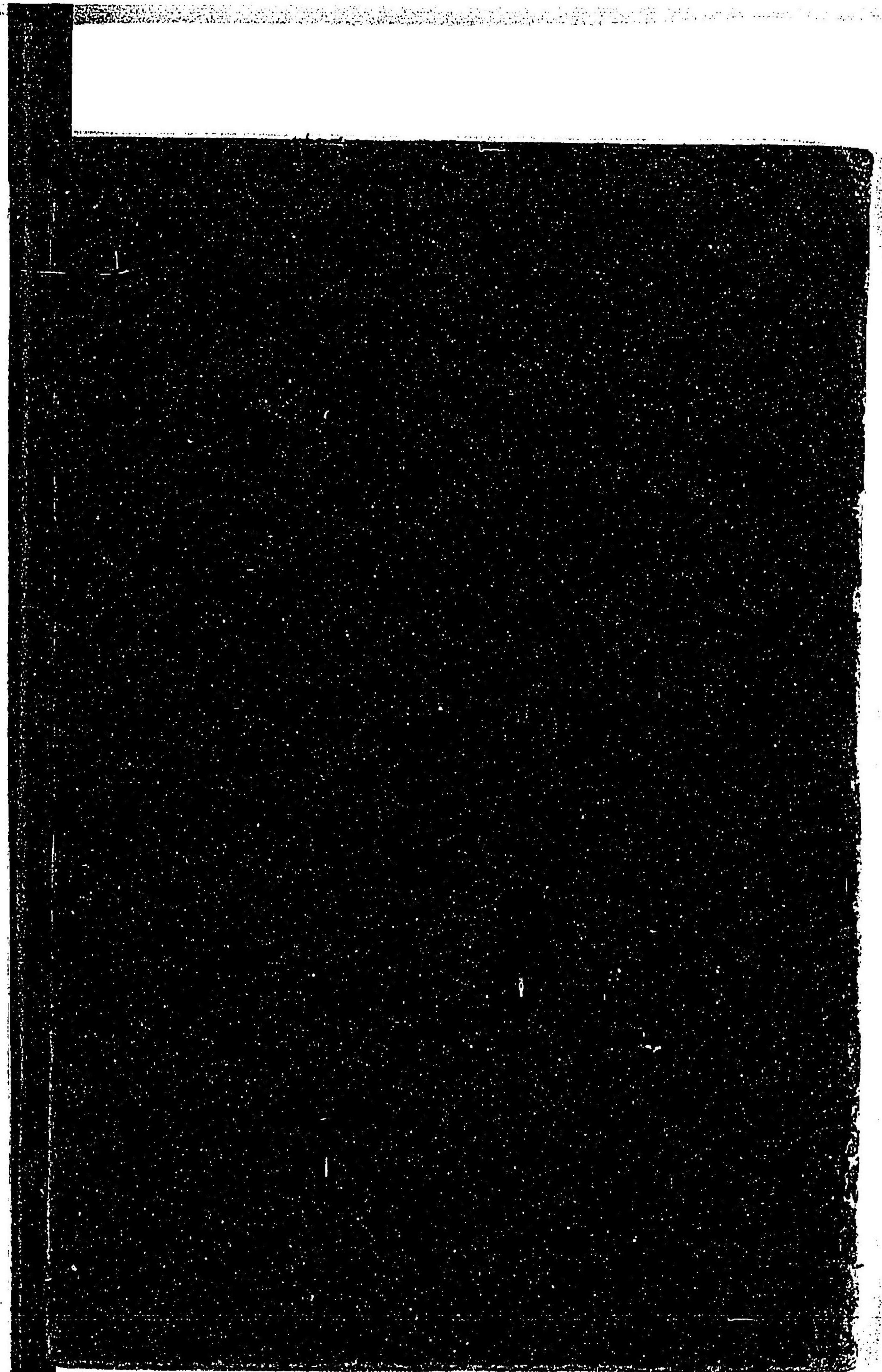
(第四) 浦賀海岸力試の場

爰に相州浦賀に於て亞米利加合衆國水師提督ペルリ氏が着船なしたるも賑はふ港内殊更今日の外國と日本の力士と立會あり力試しと聞かれば人々時刻を待居たり爰へ來掛る兩人は林大學頭の臣贊崎與左衛門續て來るに通弁森山英之助與左衛門お打向ひ多勢務中多役もて多苦勞も存じます手前の合役相良通弁役も立會なれば憂を晴さん其爲も上陸致して多座りする拙者の主人大學と亞米利加國のペルリ氏と多談話中故其間暫時休息致しするが夫も付早速承まつたに義が多座るとの餘の義もあらず此度兩國相親睦する爲の書面を双方取換せしがペルリ氏が多文面多承知なればお聞せ下され何是もてお聞せ下さるとな夫の重疊添けなしと一禮なして控れば英之助懷中より翻譯書を出しペルリ氏の書面なりとて朗誦すべし上書ス略曰謹テ貴國我國ト相親ムノ命ヲ領シ臣モ又大コ之ヲ敬ス因テ船舶ノ薪水ヲ求ル之ヲ給セヨ曰士卒養生ノ故ヲ以テ上陸スルヲ免セヨ曰海岸ヲ測量スルヲ免セヨ釣鯨夫等若貴國ニ漂着セバ其欠乏スル糧食薪水ヲ給シ且是撫恤ヲ加ヘヨと讀終り此一書を兩國へ取爲替上から互ひお親み深き印最悦ばしき事て多座る與左衛門篤と聞き兩國相親むの臣も於ても悦ぶ所とテ米藏へ先頃米を運ばせたる力士を今日海岸へ多招き有て力量試し度との事一統扣へ居ますが何れ多沙汰が多座りまじやうか此義如何と問掛れば夫の豫て願ひ有れば力士揃ひ船中へ志らする手配と答へる内お相政の小柳其他を引連れて此海岸へ來りけるかゝる所へ通弁役相良甚太郎上陸なし唯今船中より遠望鏡を以て觀覽爲べき通知あり小柳の兩肌ぬぎて仕度お掛り相良の黒人三人進來是の亞米利加土人の勇力者クローヌスミーヤコンス等ペルリ氏の差圖お依つて立會者と披露なす相政始の弟子の小縁其外の心づかいを仕て居るうち小柳夫れへ進み出恥辱を取るか名を揚るか此魁を身の晴よ一番やつて見ませうわへといひつゝ先へ立出しクローヌスと立會團扇替りのフツツを上れば双方むんづと取組つ又お放れて突合つゝ暫し勝負を上ると等しくコクスの余程の手取りもて飛鳥の如く欠廻れど終り小柳是を引付け奮發投ふこも成たりける是より双方命を受け三人掛りお小柳が怪力顯ひし黒人が取て投出す米俵手玉の如く振廻し黒人達を組敷て動けぬ様お成ければ三人一度おベケケケエエス是もて勝敗定れば船中よりして外國士官棒の花を持來り勝たる賞お小柳へペルリ氏より下され物小柳常寺押頂く人入れ相換屋政五郎世話申有て此手柄嬉しく思へば勇み立ち旅宿へこそお歸りけり

# 名大島功譽強弓

伊豆の國大島の場

清和源氏の嫡流たる八郎御曹司爲朝ハ此大島へ遷流たまへど日々武術を怠りなく嶋人共敬ひて仁義禮智の備はりし御大將と尊ひける爰も爲頼朝雅と二人の若君おとしけるが是より父君爲朝へ願ふて造りし紙鳶良等はへ持來れば爲朝これを御覽あり見事お造り上りしぞ今ハ四月の未成お國地と違ひ風強く斯大きやがなる紙鳶を風のまわく上るおの屈竟の日和なり此紙鳶ハ嫡子故兄爲頼朝お與へたり是も深き古事ある事なり鬼夜叉等が望みお依り其原因を語り聞さん乍麼紙鳶と云物の斷弄の物おあらず古ハ唐土前漢の世お韓信といへる智者ありて是を始めて考へ得しハ大風の折紙鳶お乗じこるかお高き空中より破の陣中眼下お見おろし計畧を施せし軍器お用ひし物なるぞ夫故兄お與へたり斯く大いなる紙鳶お風箏なくてハ物たらずと服紗お包みし笛を取出て是成る笛を紙鳶お結び付揚ぐれば自然と風を含み能き音を出すも一ツの輿又此笛ハ大伯父たる新羅三郎義光深く樂を好みたまひ豊原の時元を師と成して學ばれしハ秘曲傳授するお及んで時元則此笛を義光お贈られたりとも此笛ハ樂人の唇を用ひずして吹來る風お當る時ハ自然音を發し龍の吟する如くおして是未曾有の物なれど兄を敬ふ健氣な朝雅汝お之を與ふべしと件の笛を朝雅に渡せば朝雅手を延じ取らんとする時誤つて思はず落し石お打當二ツお割れば一同驚き顔見合せて忙然たり朝雅父の前へ出頭を大地へ摺附て佗れど爲朝聞いれず汝生れ付事お慎まず父を輕んずる罪免し難し父おせいばい致し呉んと怒りたまへハ江鬼夜叉及兄の爲頼妹の嶋君前後左右お支ゆるお猶も怒の解けかぬるを鬼夜叉理を責め漸々お爲朝言葉お和らけて然らば一命斷を免し是成紙鳶お結び附て空中へ至る時切て放さん是獅子の該兒を試お同じ汝等再び諫るなど止むる人々押分て自分紙鳶おくしし附け直お濱邊へ持行て風おまかせて引揚たりかゝる所お爲朝ハ吹來る風を幸ひと刀引抜心の裡我子の上を祈りつゝふつと切れば紙鳶行衛も知れず成りおけりさゝら江鬼夜叉左右より口説歎くを耳おも掛けず遙か向ふを屹度見詰り西北間お當り俄お煙り立昇るハ正數朝雅吉事の知らせと悦びたまへど人々ハ不審たつれば御曹子其不審尤なりイデ其子細申聞さん過つる夜鬼夜叉があらめ來りし曲者ハ敵の間者おあらずして足利義康の臣おして我へ贈りし書簡あり義康未子無を愛我ハ一子を乞受て相續させんと通じたり依て其臣梁田と計り密に朝雅を遣したり安堵なせとの物語お人々悦ぶ其折柄俄敵軍此島へ押寄來り御曹司爲朝ハ日頃覺之の強弓おて工藤が船と認つゝニイと一聲矢聲を掛け切て放てハ誤たず船ハ忽ちくつがへれり



特44  
996

074843-000-6

特44-996

新富座当狂言

福田熊治郎刊

M20

CEK-0195

